

## カキの枝幹をおかす新害虫カキマダラメイガ (*Euzophera* sp.) について

河瀬 憲次  
(園芸試験場久留米支場)

Studies on a New Pest, *Euzophera* sp. Moth (Lepidoptera ; Phycitinae)  
attacking Trunk and Branches of Persimmon Trees

近年、福岡県下のカキ産地において、カキの枝幹をおかす害虫が発生し、とくに未成園における本害虫の食入は主枝形成および樹勢の維持を困難にしている。最近の調査で福岡県下のみならず近畿地方以南のカキ産地に広く分布、加害していることが判明した。

本害虫は *Fuzophers* sp. (マダラメイガの1種) であることが、このほど農業技術研究所昆虫同定分類研究室の服部技官によつて同定された。同技官によれば本邦で *Euzophera* に属するものは2種しか記録されておらず、そのうち本害虫に酷似している *E. bigella* に属するものは2種しか記録されておらず、そのうち本害虫に酷似している *E. bigella* Zeller (フタモンマダラメイガ) の幼虫はビワの葉を食することである。しかし本種はカキの葉を食害することなく、またビワの葉で飼育しても食痕は認められず、食性に相違があり、蛾の大きさも異つているようである。したがつて現在種名は決定するに至つていないが、本報においてカキマダラメイガの和名を付し1960年から2年にわたつて調査し判明した事柄の概略を報告する。

本文にさきだち同定をお願いした服部伊楚子技官、また調査にあたり懇切な指導を賜つた園芸試験場奥代重敬技官ならびに久留米支場の松尾平技官、田中学技官および井上晃一技官に感謝する。

### 1. 形 態

成虫は体長約6mm、翅の開張13~15mm、全体が暗褐色の蛾で、前翅にやや淡黄褐色の波状2横帯があり、その間に不明瞭な2箇の斑点が認められる。静止の時は翅をとじて矢はず状を呈する。

幼虫は老熟すると体長約13mmとなり、胴部は乳白色から生育がすすむにつれて暗褐色、口頭部は光沢ある褐色を呈する。老熟すると灰白色の粗繭の中に蛹化し、体長7mm程度の光沢ある黄褐色で羽化前には暗褐色となる。

なお産卵については未調査であるが、雌の成虫を解

剖してみると、およそ60~70個の卵が認められる。

### 2. 加害状況

幼虫が樹皮下の形成層沿いにその附近一帯を数世代重ねて食入加害している。外部に褐色の虫糞を排出するので食入部は容易に分る。

加害状況は分岐部の周囲、切口、あるいはその癒合部、炭疽病痕等、凹凸の多い場所を好む傾向が見うけられる。また栽培管理の良否を問わず発生し、多い場合は1樹に40箇所以上食入しているのも認められた。食入の大部分が2m以下の主枝の分岐部で地際に近いほど、食入数が多い。したがつて強風あるいは果実の重みで裂けやすくなるから若木の主枝形成にはきわめて悪い影響をおよぼすことになる。また形成層附近の食入加害がすすむと樹勢が衰え、ひどい場合には環状はく皮を行なつた状態になつて枯死するに至る。1箇所に数頭の幼虫が食入していることも少なくない。

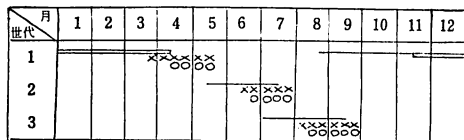
### 3. 分 布

久留米市近郊のカキ集団産地の未成園にとくに多いが北部九州一帯には広く発生がみられた。さらに最近の調査では、近畿地方以南の京都、大阪、奈良、和歌山、鳥取、岡山の各府県に認められ、とくに大阪、奈良地方に多い。また愛媛県下でも発生しているとのことである。未調査の近畿以北は不明であるが本種の分布はきわめて広い。

### 4. 生活史の概要

定期的な採集と室内飼育等の観察の結果を総合すると、久留米地方において普通、1年3世代を繰返している。幼虫は粗皮下の食入部の薄繭内で越冬しており、3月上旬から蛹化をはじめ4月20日をピークは第1世代の成虫が出現する。第2化期成虫は6月中下旬を中心に、また第3化期成虫は8月中旬から9月下旬までに出現しているようである。このように3回の発生ピークが一応認められるのであるが発生期間は連続的であつた(第1図)。

第1図 カキマダラメイガの生活史概略図



注) ○羽化期×蛹化期-幼虫期 □越冬幼虫期

卵については確認していないが孵化直後と思われる微小な幼虫は食入痕や凹凸の多い粗皮の間で認められる。したがってこれらの場所に産卵されるものと推定される。幼虫は5月頃を除き年中みることができた。おもな活動時期は6月から11月で、11月中旬頃より藪をかけはじめ12月中旬にはほとんど越冬状態にはいる。

蛹の期間は第1化期は1か月余り、2化期、3化期は1週間から10日くらいである。

5. 品種抵抗性

カキの品種により被害の程度を異にし、被害の甚しい品種は富有であり、西条、平無核がこれにつき、次郎、御所にはきわめて少ない。要するに樹皮の比較的粗い品種につきやすいようである。

6. 天敵

野外で採集した幼虫を室内で飼育した際、蛹化したものに白色を呈するものが見うけられた。これを三角フラスコに入れて観察していたところ、2種類の寄生蜂が現われた。しをし種名については同定を依頼中である。

7. 防除法

粗皮はぎ) 食入場所を減少させるために有効である

が、ヘタムシを対照に成園になつてから行なうのでは間に合わず、本害虫に対しては未結果時代から実施すべきである。食入場所をけずる場合は、かえつて木質部に至る傷口がより大きくなり、樹勢を弱らせる結果になるから注意しなければならない。また本法のみでは完全な防除はできない。

薬剤塗布) ホワイトウオッシュおよびガンマーライトの塗布はその部分の食入を防止できるので、主枝形成に重要な分岐部附近の塗布は効果的である。

薬剤散布) 羽化期に対して薬剤散布が考えられる。ネオサッチュウコートを用いて防除効果を調べた結果は第1表と第2表に示すとおりであつた。羽化が比較的一斉である第1化期散布がとくに効果があり、ほとんど完全に食入を防ぐことができた。

第1表 第1化期におけるネオサッチュウコート散布効果 (1962)

試 験 区		供試樹数	総食入箇所数	1樹平均食入数
A 園	ネオサッチュウコート 50倍	9	0	0
	無 散 布	9	153	17.0
B 園	ネオサッチュウコート 50倍	10	6	0.6
	無 散 布	10	90	9.0

註：4月26日散布，6月18日調査

第2表 第2化期におけるネオサッチュウコート散布効果 (1962)

試 験 区		供試樹数	総食入箇所数	1樹平均食入数
ネオサッチュウコート	50倍	4	3	0.75
"	100倍	5	4	0.80
無 散 布	布	9	23	2.67

註：6月18日散布，8月27日調査